

理想の恋愛とは...!?

左馬頭

監修 辻孝宗

西岡志誠

源氏物語

東大生と読む



大河ドラマ

# 「光る君へ」

がもっと楽しくなる!

名門国語教師と元偏差値35  
東大生作家が案内する

最もわかりやすい

# 源氏物語ガイド!



東大生と読む

源氏物語

西岡吉誠

監修  
辻孝宗

星海社

287



SEIKAISHA  
SHINSHO



## はじめに

みなさん、『源氏物語』にどんなイメージを持っていますか？

「難しいし、昔の話だからつまらない！」と持っている方も少なくないのではないのでしょうか。

何を隠そう、今ではこうして本を書くほどこの物語が好きで僕も、かつてはそう思っていた一人です。

そんな元・古文嫌いだからこそ伝えられる『源氏物語』の面白さを、これからこの本で解説していければと思います。

僕は高校生時代の偏差値が35で、受験古文で読まされる『源氏物語』が難しくくて苦手で、逃げ出したいくらいでした。きっと、同じ思いをした人もたくさんいるは

ずです。

僕は苦手を克服すべく、マンガでわかる本を手に取りました——それが全ての始まりです。その本が驚くほど面白く、僕はなんと、あんなに苦手だった『源氏物語』が一気に好きになってしまったのです。それが、本書のイラストを描いてくださった花園あずきさんの作品『はやげん！ はやよみ源氏物語』でした。それ以降、すっかり『源氏物語』の世界に魅せられてしまい、原文をはじめさまざまな文献を読み漁るほどになってしまったのです。

古文が苦手だった僕が『源氏物語』に魅せられたのはなぜか、今回改めて考えてみました。現時点での仮説はこうです。今から千年も前に書かれた古い作品で、「世界最古の長編小説」と言われているにもかかわらず、不思議なくらいストーリー展開が現代的で、読んでいて「今でもこういう恋愛ものってあるよね」と思えるシーンがたくさんあることが、現代人にとって大きな魅力なのだと思います。いわば『源

『源氏物語』はエンターテインメントの原型と言えるのです。

さて、僕は普段さまざまな学校で教育に関わっているのですが、ある時、日本屈指の名門進学校・西大和学園で国語の教鞭をとっている辻孝宗先生とお話しする機会がありました。

その時も『源氏物語』の話になり、「現代人はスルーしてしまうけど、平安貴族から見たらこの描写はツツコミどころなんだ」「リアルタイムで読んでいた平安貴族はこのポイントを面白がっていたんだ」という、古文の先生だからこそわかる深い楽しみ方を教えていただきました。

この本はそんな、『源氏物語』に魅せられた元・古文嫌いと、毎年東大生を輩出する名門中高のエリートに古文の魅力を教えている国語の先生がタッグを組んで、難しい、つまらないと思われる『源氏物語』をわかりやすく深くご紹介しようとして生まれたものです。

本書の第1章では、なんと10分で『源氏物語』の大きな流れがわかるように、本  
当にざっくりとまとめました。省略した重要人物もいるくらいに超要約ですが、物  
語の大枠はここさえ読んでいただければ一発で理解できます。

第2章以降では、重要なシーンや面白いシーンを厳選して詳しく取り上げ、原文  
を読むだけではわからない面白さや、ツッコミどころだらけの光源氏の言動などを  
解説していきます。詳しくは「第3章 雨夜の品定め」を見ていただきたいのです  
が、「入試問題によく出るけど、実際に読んでみると下世話で、平安貴族たちはきつ  
とゲラゲラ笑いながら楽しく読んでいたんだろうな」というシーンもあります。

そして所要所で辻先生にご登場いただき、国語の先生として「勉強になる、そ  
して奥深さが感じられるポイント」も解説していただいております。ただ「笑える」  
「展開が面白い」というだけではなく、紫式部の高い構成力の妙が楽しめるポイント  
をじっくりご堪能ください。



ということ、ぜひ知られざる『源氏物語』の魅力とツツコミどころを楽しんで  
いただければと思います。

西岡壱誠

目次

はじめに 3

第1章

10分でわかる！

源氏物語 11

本書で扱う主要登場人物 31

第2章

光源氏の誕生

39

第3章

雨夜の品定め

71

第4章

若紫誘拐

99

第5章

藤壺の出家

131

第6章

女三の宮の登場

155

おわりに 『源氏物語』の終わりとともに

186





第1章

10分でわかる！  
源氏物語

HIKARU GENJI

さて、まずは『源氏物語』全体のストーリーを10分でわかるように解説します。

物語は、とある天皇の治世の時のこと。

その天皇は、身分の低い女性のことをとつても愛してしまいました。それはもう激しい溺愛つぷりでした。

でも、天皇の奥さんはたくさんいる中で、その女性だけが愛されていたものですから、他の女性たちから虐められてしまい、病気がちになってしまいます。

そんな中で、その女性は子供を産みます。

**この子供こそが、『源氏物語』の主人公「光源氏」です。**

光源氏はこの世のものとは思えないほど美しい赤ちゃんで、天皇も彼のことをとても可愛がりましたが、お母さんはそのつらい境遇きょうぐうからか、光源氏が三歳の時に亡くなってしまいます。

天皇はめっちゃくちや落ち込みました。が、光源氏のお母さんの親戚で、お母さん

そっくりな顔の「藤壺<sup>ふじつぼ</sup>」という女性と結婚することになり、ちよつと気分が回復します。

でもこの時、藤壺さんはまだ十四歳。光源氏は九歳だったので、光源氏の方と仲良くなつていきました。光源氏も、お母さんそっくりな彼女に懐<sup>なつ</sup>いていきます。

これ、現代のドラマで見たことあるような展開、つていうか**完全に昼ドラです**ね。「お父さんの再婚相手の女性が若くて、義理の子供と年齢が近く、子供の方と仲良くなつちゃう」みたいな展開、あるあるです。

で、実際に彼らの関係性は、昼ドラのようなドロドロした展開になっていきます。さて、天皇と藤壺と光源氏は楽しく生活していたのですが、ある時転機が訪れます。十二歳になった光源氏が元服することになったのです。

この当時、元服したらもう一人前の男性です。結婚もしますし、天皇の奥さんである藤壺とは会えなくなつてしまいます。たまに会えることになつても、すだれで

仕切られて顔も見えない状態になってしまふのです。当時のしきたりとはいえ、悲しいですね。

そして光源氏も、この当時の慣習に則って結婚することになります。結婚相手の女性は「葵の上あおいうえ」という女性でした。でもこの女性が、とにかく激しいツンデレキヤラだったんです。全然デレてくれなくて、光源氏に対してツンツンな態度でした。まあ、こういうツンツンした女性が好きだという男性も少なくないと思うんですが、光源氏はどちらかというと母性がある女性の方が好きだったので、葵の上とは相性最悪です。

早くにお母さんを亡くした光源氏は、やはり女性には甘えたいタイプでした。母性を求めていたんです。で、**光源氏が好きだったのは、義理の母である藤壺**だったんですよ。でも、知っての通り藤壺はお父さん、つまり天皇の奥さん。どうあっても愛することはできない関係性なわけです。

**愛したいけど、愛せない。でも、やっぱり愛してしまふ。**



というわけでこの後、光源氏は「藤壺みたいな母性あふれる女性、どこかにい  
いかな〜」という願望を叶えるために、**藤壺の代わりになりそうな、いろ  
んな女性にアタックしていきます。**

『源氏物語』の作中で光源氏と恋人関係にあつた女性は十人を超えます。「手を出し  
すぎ!」と思うかもしれません。ただ、節操なくいろんな女性と逢瀬おうせを繰り返す好  
色な人として描かれているのは確かですが、当時の平安貴族は結構そんなものだっ  
たと思います。そもそも光源氏は天皇の子供で、スーパーモテモテ男子でしたか  
らね。

でも、光源氏はなかなか納得のいく関係を築くことができませんでした。藤壺み  
たいにちよつと年上の女性と付き合おうとするんですがうまくいなくて（六条御息  
所むすね）、義理のお兄さんの元カノとすぐく親密になって「やっと思の女の子に出会え

た……！」と思いきや、その女性は怨霊に殺されちゃったり（夕顔）、「めっちゃ美人！」という噂を聞いた子に手を出したら実はブスでした、ということもあつたり（未摘花）、やがて妻の葵の上もちよつとだけデレてくれるようになって子供もできるんですが、また呪い殺されてしまつたり。

光源氏、残念ながらこのように、どの人ともそんなにうまくいきません。

なぜうまくいかないのか、理由は明らかです。もちろんタイミングや運もあるんですけど、大元の原因はというと、光源氏にとって誰もが「代わり」の人でしかないからなんですよね。

光源氏の一番の最愛の人は、藤壺だったんです。

ということ、光源氏は意を決して藤壺にアタックします——「愛してはいけないことはわかっているけど、でも、好きです」と。猛アタックに藤壺もついに折れて、一夜を共にしてしまふのです。

で、もう昼ドラなどではお約束の展開ですが、**その一夜のタイミングで子供ができちやつて**、二人とも「ヤベー!!」と大騒ぎ。結局その子は天皇の子供と見なされたのですが、まあ二人ともめちゃくちや焦りました。

その後すぐのタイミングで天皇が亡くなつてしまい、光源氏は、本当は自分の子供であるその子の後見人としてお世話をするようになります。そして、そのお世話の最中にはもちろん、藤壺へのアプローチも継続しています。

光源氏は「やっぱり藤壺好き!」とずっとアプローチするのですが、藤壺からすると「私たちの関係がバレたら全部パーで、子供の立場も危うくなるじゃない! 何考えてんのよ!!」ということ逃げ、**ついには藤壺、出家を**してしまいます。

この時代の出家は、今の出家よりも何倍も重いものでした。もう本当に俗世との関わりを断つことで、今後一生、光源氏と会わないという選択です。子供のことも、何より光源氏のことを守る選択であるわけですが、これを聞いた光源氏はマジでシ

ヨックを受けて、茫然自失ぼうぜんじしつになって、正気を失ったのかお兄さんの婚約者と

の逢瀬おぼろを繰り返してしまっただけでした（朧月夜）。

……ごめんなさい、今読んでいて「は？」とツツコミたくなった方もいるかもしれません、本当にそう書かれています。もともと関係があつたお兄さんの婚約者のところに通い詰めて、その逢瀬の現場を押さえられて、「あーバレちゃったかー。まあでも、もう、どうでもいいやー」となってしまう投げやりな光源氏。

ええ、**光源氏、完全に正気を失っています**。それだけ藤壺の存在が大きかったわけですね。

藤壺はその後、病気で亡くなってしまいます。結局光源氏と藤壺が結ばれたのは一夜だけだったのです。儂はかないですね。

さて、そんな中でもう一人、光源氏の「最愛の人」になる女性がいます。それが、

むらさき うえ  
「紫の上」です。

ある時偶然、光源氏が十歳に満たないくらいの紫の上（当時の名前は「若紫」と出会  
い、「あれ!?」あの子藤壺にめっちゃ似てるんだけど!」と気づきます。紫の上、実  
は藤壺と親戚関係の女の子だったのです。それがきっかけで、「あの女の子は、私の  
最愛の人になってくれるに違いない」と考えた光源氏。紫の上が十四歳になる時に、  
光源氏はほとんど誘拐ゆうかいに近いような形で半ば強引に妻として迎え入れます。そして  
自分の理想の女性に育ってもらうために、いろんな教養・礼儀作法を教え込みます。  
ちなみに、光源氏と紫の上の年の差は十歳くらいだと考えられているのですが、  
この年の差から**光源氏は読者にロリコンとして扱われる場合が多い**  
です。その上でその子を自分好みの女性に育てていくというのも、**現代的な感  
覚で言うとかかなり「キモい」です**ね（笑）。

藤壺亡き後、**光源氏の心の支えになったのは間違いない彼女・紫の上**でした。

紫の上は、光源氏が苦しい時にも支えてくれました。やがて光源氏はお兄さんの婚約者との逢瀬が発覚し、紫の上を残して須磨へ退去して長らく会えない時期が続きます。これは光源氏のピンチの時期で、『源氏物語』で一番源氏が追い詰められる場面なのですが、会えない時にも紫の上はずっと、彼のことを信じて待っていてくれます。

その甲斐あって、一時期は力を失っていた光源氏は復権します。父が亡くなった後、次の天皇が藤壺と光源氏の子になり、その天皇から権力を与えられて、光源氏はいよいよ、紫の上をはじめとする自分の愛する女性たちと仲良く暮らすことができるようになるのでした。**光源氏の権力の絶頂**です。

と、ここで終わったらハッピーエンドなのですが、『源氏物語』はこれで終わりません。光源氏と紫の上の関係には、ある出来事から大きな亀裂が入ってしまいます。「女三おんなさんの宮みや」という女性の登場です。彼女は、光源氏のお兄さんと、あの藤壺の妹

の間に生まれた子です。光源氏のお兄さんは、「うちの娘、十四歳なんだけど、いい嫁ぎ先がなくてさ。源氏の奥さんにどう？」と言つてきたのです。

当時光源氏、四十歳です。二十六歳差です。やっぱり光源氏はロリコンなんじゃないか？ と皆さん思われるかもしれませんが、この当時、これくらいの年の差結婚はまああることでした。

光源氏は悩みました。自分は紫の上のことを愛している。きつとここで女三の宮を迎え入れたら、紫の上は傷付く。本来なら迎え入れるべきではない。

でも、**光源氏は女三の宮を迎え入れることにしました。**

結局、光源氏の一番の最愛の人は、藤壺です。紫の上のことも、その代替として愛している節があります。**光源氏は結局、「藤壺の姪、藤壺に似ているかもしれない子」に心惹かれてしまったわけです。**

ということ、女三の宮を迎え入れる当日。光源氏はめっちゃくちゃ期待を膨らませて彼女に会いにいきました。

そしたら、なんと。

## 全然光源氏の好みじゃありませんでした!!

……ええ、藤壺には全然似てなかったっぽいです。これには光源氏もがっかり！  
そして案の定、紫の上は大シヨックです。「私はどうせ、光源氏にとつて、代替品でしかなかったのね」と病んでしまいます。光源氏、完全にやらかしちゃいましたね。病んでしまった紫の上を、頑張つて看病しようと思います。

そんな中で、光源氏とは別に、女三の宮のことを好きになつてしまった男の人がいました。名前を柏木かしわざきと言います。光源氏の義理のお兄ちゃんの子供です。柏木は、偶然女三の宮の姿を見てしまつて、想いを爆発させ、女三の宮と一夜を共にしてしまいます。で、その時の一夜が原因で、なんと**子供ができてしまいました**。

この展開、どこかで見覚えがありませんか？



そうなんです、光源氏は旦那さんのいる藤壺と子供を作ってしまったわけですが、それとほとんど同じ構図なのです。

光源氏は柏木と女三の宮の關係に気づき、「ああ、これも因果応報つものかな」と考えました。ですがその上で、「それはそれとして**柏木マジふざけんなよ**」と、自分のことを棚に上げてブチ切れます。とある宴会の席で柏木に「いやー君、今は若いからいいけど、年取ったらいいことないよー？」みたいな感じで遠回しにプレッシャーをかけて、「お前、気づいてるからな」アピールをしたのです。それを聞いて柏木は「あ、俺の人生終わったわ。権力者の光源氏にこんな言われたら生きていけないわ」と悩み、病気になってすぐに死んでしまうのでした。

そして結局、**この一件が原因となって、紫の上は失意の中で死んでしまいます。**

そして紫の上を失った光源氏もまた、失ったものの大きさに気づきつつ、亡くなってしまうのでした。

これが、光源氏の物語です。

『源氏物語』自体はもう少し続き、ここまでの登場人物の子供の代が描かれる「宇治十帖」というパートで終わります。

主人公はなんと、先ほどの女三の宮と柏木の子供、「薰」かおるくんです。世間的には光源氏の子供として認知されていますが、柏木との不義の子供であることは読者はみんなわかっています。薰くん自身も、「俺って本当に光源氏の子供なのか……？ 似てないって噂されてるし、お母さんはすぐ出家しちゃったし……」と思い悩み、自分のルーツを疑っています。そんな出自が関係したのか、薰くんはかなり影のあるイケメンとして描かれています。俗世の関わりよりも仏道修行が好きで、かなり厭世的せいです。

そしてもう一人、この物語には主要な登場人物がいます。天皇の子供の「匂宮におうみやくん」です。匂宮くんは、光源氏の娘の一人である明石中宮と天皇の間の子供です。

光源氏の孫です。

ですからいろいろな女性に手を出す光源氏の気質は匂宮くんが引き継いでいて、逆に薫くんは一人の女性に一途な姿が描かれます。

ある時、薫くんは宇治に人に会いにいきます。その時にふと、その家の娘さん姉妹の姿が目に入ります。お姉さんの大君と、妹の中君です。二人とも素晴らしい姿でつい見入ってしまったのですが、後から偶然それを見ていた老婆に驚きの事実を伝えられます。なんとその老婆は柏木の乳母で、薫くんの出生の秘密を知っていたのです。薫くんは自分が光源氏の子供ではなく、柏木の子供であることを知ります。

「あー、やっぱりそうだったのか。じゃあ自分は光源氏を死に追いやった、罪の子なんだな。まあでも、自分のルーツがわかってスッキリしたな」

と感じた時に、ふと先ほどのお姉さんの大君のことが頭に浮かんだのでした。大君のことが好きになってしまったんですね。

で、その話を聞いた匂宮くんは、「マジで!? そんな可愛い子なんだったら、俺も!」と二人にアプローチをかけます。そして匂宮くんは姉妹のうち中君の方を好きになり、すぐに求愛の手紙を出しました。

薰くんは大君、匂宮くんは中君、ということですね。

しかし蓋を開けてみると、匂宮くんと中君はうまくいったのですが、薰くんの方はなかなか大君との関係がうまくいきません。「私なんかと一緒にになったらあなたを不幸にしますわ」と、大君は頑かたくなに薰くんのことを受け入れてくれないで終わってしまうのです。

さてそんな中で、匂宮くんと中君は婚約まで漕こぎ着けます。ですがやっぱり光源氏の血を引いている匂宮くんは好色で、いろんな女の子に手を出してしまいます。そして匂宮くんはお母さんから別の女性と結婚させられてしまい、大君中君の姉妹を心配させてしまいます。大君は妹のことが心配で心配で、ついには病気になつて、なんと死んでしまいます。

薫くん大ショックです。なんたって、好きだった女の子が死んでしまったのですから。塞ぎこんでしまった薫ですが、妹の中君から「お姉ちゃんとすごく似てる人がいるそうなんですよ」という話を聞きます。彼女は「浮舟」と言って、実はこの二人の妹でした。大君中君の姉妹も知らなかったことですが、同じお父さんの隠し子で、認知してもらえなかったとつても不遇な子でした。

薫くんは「今度こそ」と浮舟に猛アタックをかけます。中君からも援助してもらっていい感じになるのですが、案の定というかお約束というか、匂宮くんにも嗅ぎつけられてしまいます。「え、そんな可愛い子がいるんだったら俺も」というノリです。読者からすると「マジで懲りないなお前」と思いますが、匂宮は、「薫はさ、お前のことを大君の代わりとして見ていただけなんだよ。だからお前は俺とくっつけないよ」なんて甘い言葉をかけて、強引に浮舟と関係を持ってしまいます。二人のスパダリから求婚されるっていう、王道の少女漫画展開ですね。

でも、浮舟はとても苦しみます。「どうせ薫様は私のことを大君の代わりとしてしか見ていない。匂宮様だって、薫様から私を取って優越感を満たしたいだけだわ。私は結局、幸せになんてなれないんだわ……」と。

そんな中で、薫は浮舟が匂宮と会っていたことを知ります。「浮舟は強引に迫られたんだろうけど、匂宮あいつ、マジふざけんよ」と、とにかく浮舟に会いに行こうとします。その時に出した手紙の内容から、浮舟は自分と匂宮の関係がバレたことに気づきます。「ああ、薫様にもこれでバレてしまった。かと言って匂宮様に泣きつくこともできない。私の居場所は、もう、どこにもないんだわ」と嘆き悲しみ、そして。

気づけば彼女は、宇治川に身を投げてしまったのでした……。

**この展開、光源氏と紫の上の関係と似ていますね。** 光源氏の愛が、

結局藤壺への愛の代替でしかなかったと知って悲しんだ紫の上と同じように、浮舟

も、薫の愛が大君への愛の代替でしかないことを知って苦しみ、身を投げてしまったのです。

ですが紫の上と違って、浮舟はこの時、生き残りました。周囲からは死んだと思われていましたが、山寺に拾われて保護されていたのです。でも「もう私は俗世には懲り懲り。出家させてください」と、尼になることを決意します。

そこに、「もしかしたら浮舟が生きているかもしれない」という噂を聞きつけて、薫くんがやってきます。ただ、これ以上苦しみたくなかったのか、浮舟は会いませぬ。薫は手紙を書いて浮舟の弟に持たせ、彼に「姉上ですよね、薫様と会ってあげてください」とお願いしてもらいました。

はたして、結果は？

「私はこの人の想い人ではありません。勘違いしていると思います。」

ます」

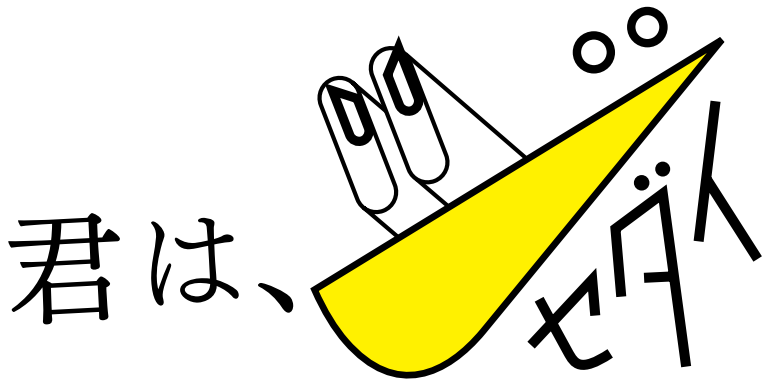
浮舟は結局、薫には会いませんでした。余韻の残る終わり方ですが、ここで、『源氏物語』は終了です。

ここまで駆け足で『源氏物語』のストーリーを見てきました。

現代のドラマや漫画でよく見るあるある展開やツッコミどころが数多くあって面白いですよね。

ここからは、メインキャラクターをもう一度おさらいした上で、特に一押しの子役を詳しく解説していきたいと思います。





君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**